

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣 良次

2018. 8
No.300

AI時代に即した働き方とは

6月27日付日本経済新聞に掲載された元富士通総研会長、伊東千秋氏の記事を一部紹介します。

定型作業を自動化する「RPA(ロボティック・プロセス・オートメーション)」でパソコン業務の47%を自動化できるとされている。ルール通りに働いている仕事はなくなると思った方がよい。メガバンクが人員削減に踏み切るように、遠い未来の話ではない。

現在叫ばれている働き方改革には、こうしたAI時代に対応できる社員をいかに育てるかという視点が欠けている。創造的(クリエイティブ)な仕事は天才にしかできない。問題は革新

的(イノベーション)な仕事を普通の人はどう生み出してもらうかだ。(中略)

米国で富士通子会社の経営を任されていた頃、社員をすぐ辞めさせないためにどうするかを考えた。一番効果があったのは研修制度だった。キャリアが磨けるというわけだが、それが逆に定着率を高めることになった。

経営者も社員も一カ所に閉じこもっていたのでは互いに不幸になると実感した。フラットな組織、多様性に富んだ社員、アイデアを頭から否定しない寛容な風土。企業自体が丸ごと変わらなくてはならない。

“イナテック流”働き方改革！

第四次産業革命の時代にさしかかっている現在、前述の伊東氏の言うとおり、パソコン業務の47%が自動化されます。また、人工太陽により、電気エネルギーは無料になります。自動運転や空飛ぶ自動車は現に存在しています。病气も人工細胞とAI技術で完治し、人生100歳は目前です。

このような時代の中で、イナテックも「企業自体が丸ごと変わらなくてはならない」ということです。「イナテック流」と言う前に、「まだできていない16H/日、生産体制」、「60H/月、超の残業」、「土曜日・日曜日出勤」という現状を無視しては、「働き方改革」なんて、とんでもないと思っています。

まず順番があります。

1. 日曜出勤をやめよう
2. 土曜日残業をやめよう
3. 土曜日出勤をやめよう
4. 急な休出をやめよう
5. 急な残業をやめよう

これらの実現が先ではないでしょうか。これを実現することにより、創造的で革新的な職場が生まれ、働き方改革(AI時代)に対応できる社員が育つのだと思っています。

「AI時代に即した働き方」とは、この超現実の改革から始まり、それがイナテック社員の発想の転換、そして、定着率を高めることにつながるすばらしいイナテックになるものと信じております。

さあ、「急な残業」、「急な休出」、「ダラダラ残業」は止めましょう。

AIが未来を変える

事例	Before	After
単純作業の代替 -全量検査-	熟練が必要なため増員ができず生産のボトルネックに	単純作業を任せることによりスタッフを活性化
サプライチェーンの最適化	取扱商品が多いと在庫管理・生産管理が大変	在庫管理・生産管理データ、マクロデータを基に受発注予測
成約に結びつく顧客が分かる	見込み客に手当たり次第アプローチ	見込み客ごとに成約率を算出、効率的な営業活動に
AIが人を採用	大学生一人当たりのエントリー数は増加	活躍社員のエントリーシートを学習、AIが合格・不合格を判定
人に見抜けないものを見抜く	口内炎と口腔がんの判別は容易ではない	5,000~1万枚の写真を学習して、がんの判別をする
ピンポイント農薬散布	農家が畑全面に農薬を散布	ドローンと画像認識AIにより虫食い部分だけに農薬散布(この野菜は大ヒット商品にブランド化した)

先日、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの古川貴大氏の講演を聞く機会がありました。そこでのAIの導入前後の話について、上記の表にまとめてみました。

この講演の中で、「例えば、戦中の大将が『敵に味方を殺されないようにしろ！』と味方AIロボットに命令しました。さて、味方AIロボットは、どんな行動をとったでしょう」という話がありました。答えは「大将を含めた味方全員をAIロボットが殺した」です。

つまり、AIロボットに「常識って何？」とどうこうを教えるのは難しいのです。

AIに感情はありません。倫理観・道徳観もありません。我々が大切にしなければならぬものは、AIロボットが苦手な「一般常識」、「感情」、「倫理観・道徳観」なのです。つまり、イナテックで毎月参加いただいている木鶏同好会で『人間学』を学ぶことです。やはりイナテックは人間学を学び、王道を進むことで、将来とも生き残れる企業にいきます。

六二

知成之必敗、則求成之心、不必太堅。知生之必死、則保生之道、不必過勞。

でき上がったものは、いつかは必ず壊れるものであることを悟れば、でき上がることを求める気持は、必ずしもそれほど強くはならないであろう。また、生きているものは、いつかは必ず死ぬものであることを悟れば、できるだけ長生きしようとする方法は、必ずしも過度に苦勞するほどのこともないであろう。